

『ドイツ語』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

共通テストの追・再試験が実施された。本試験と同様に、ドイツ語学習をめぐる状況は多様であり平均的なドイツ語学習者を想定しづらくはあるが、ドイツ語を「高等学校で3年程度継続して学んできた」受験者と仮定し、評価を行っていききたい。

追・再試験の受験者は、本試験に一度目を通し、出題傾向を把握していると考え。そのため、入試の公平性を保つためには、追・再試験は全般を通じて本試験より難度がやや高いことが妥当だと考える。

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）21 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

全体の構成は大問が1つ減り6つとなり、設問数も昨年度の51問から48問となった。昨年度まで第1問にあった発音・アクセントに関する知識を問う出題がなくなった。特定の場面や状況に応じた会話や長文など、受験者には今まで以上に幅広く学び、正確な知識が求められる出題である。

第1問 使用語彙は本試験よりも受験者にとって見慣れたものが多い印象を受ける。設問に取り組むには、それぞれの解答番号に入る品詞を見極め、品詞に応じた適切な変化をしている①～⑨の選択肢の中から選ぶ。総合的文法能力を問うているのかもしれないが、品詞の選択や変化の確認など細かな点に気を配る必要があり受験者が何を問われているのか理解をして、問いに取り組み始めるまでにかなり時間を要するかもしれないが、本試験に一度目を通して受験者ならば形式に少し慣れていると思われる。自分のことについてややフォーマルな文体で表現しなければならない本試験と比べ、求人広告を読み取る追・再試験の方がより読解に近い。この問い方では設定された場面が生かされていない。

問1 与えられた選択肢には2つ使わないものがあるが、重複して解答してよいのか設問に第2問のように指示がない。各解答は、**1** 関係代名詞 1 格、**2** 動詞の過去分詞（受動態）、**3** 熟語表現に含まれる前置詞、**4** 従属接続詞、**5** 分離動詞の前つづり、**6** 助動詞（接続法Ⅱ式）、**7** 助動詞（接続法Ⅱ式）である。**3** は、auf der Suche nach の前置詞 auf を問われているので、単純に知識を問う出題になっている。教科書でこの表現自体を目にすることがまれである。また**5** には分離動詞の前つづり**8** vor が入るが、本試験でも同じ問われ方をしており、想像しやすい。

問2 本試験同様、設問文の中に「適当なもの」とあるがここまで文法用語を避ける必要があるのか。せめて教科書で用いられている「適切な変化」や「適切な語尾」と問うことはできないのだろうか。本試験と同様に文脈に関係なく（ア）形容詞変化、（イ）定冠詞類複数 2 格、（ウ）不定冠詞中性 2 格、（エ）複数の語尾、それぞれ知識として持っていれば解答可能である。

第2問 本試験と同様の出題形式であり、本試験同様1問減った。与えられた語を空所に当てはめ、文を完成させる出題。不要な選択肢が1つあり、文法の知識を問う出題となっている。

問1 **12** に本動詞が入り、**13** には並列の接続詞 denn が入る。教える側としては、「um…

zu～」の理解度を問いたくなる。分離動詞の前つづり vor が本試験から数えると 3 回設問に関わっている。

問 2 従属接続詞 seitdem の副文中にある「vorbei sein」の意味と、主文の「nicht mehr」の位置が問われている。

問 3 3 格支配の前置詞 außer と aus の意味が理解できているかが問われている。特に außer は除外ではなく「(追加する意味での) ～の他に」という意味で用いられているため難度が高い。

第 3 問 一連の比較的長い会話等を読み、設問に答える出題。本試験と違い場面の説明文は日本語になっており、場面の切替えが分かりやすく、また図やスマホのメモ等が間に入っておらず対話に集中しやすい。登場人物も 3 名であり一貫してゼミナールについて話をしているため本試験よりも読みやすい印象を受けた。使用語彙もそこまで難しくはない。

問 1 18 の前で「Ja,」と肯定する言葉に付け加える一言を選ぶ。正答は①であるが目にする機会は使用教教材で差が生じる可能性がある。③einverstanden が本試験に続き第 3 問での選択肢にある。

問 2 他の選択肢と比較して正答④を選ぶことは難しくはないが、下線部⑭の発話時点では考えている段階であり正答④もその内容を思っているかどうかは不明である。

問 3 8 ページの Yuka と Herr Yilmaz のやり取りから判断する。他の選択肢を除くためには対話全体から細かく情報を読み取らなければならない。

問 4 下線部⑮「Das fiel mir so schwer.」にある schwerfallen は難しいが、schwerfallen を選択しなければならない設問よりは、選択肢の表現に配慮を感じる。

問 5 後半の内容全体を読み適切な答えを選ぶ。設問の日本語が本文内容の理解の一助となっている。

問 6 下線部⑯の前にある Yuka のセリフを理解し、選択肢を精読しないと正答④にたどり着けない。

問 7 ドイツ語の設問であり、Yuka と Ichiro それぞれが何をしたのかを区別する。ここまでの内容理解ができていればそこまで難しくはないが、問 6 同様に選択肢を丁寧に読み込まなければならない。

第 4 問 本試験同様にインタビューを読み、内容をメモに置き換えるなど新しい出題が含まれる。テーマは「日独企業に関するプレゼンテーション」であり受験者にとって必ずしも身近とは言えないが、本試験と違い 2 人の話者が一貫した話題で話しているため本試験より読みやすい印象を受けた。メモにある略語 dt. を目にしたことがある受験者はほとんどいないのではない。本試験第 3 問に出ていた Gewinn の複数形 Gewinne が再度本文に使われている。

問 1 本文で用いられている語と選択肢の表現が分かれば、正答を見つけ出すことは難しくはない。

問 2 Burghard 博士の 1 つ目のセリフ anstellen の言い換えを探す。anstellen という語自体は難しいが、その前後が分かり、選択肢の動詞を入れていけば④を選べる。本試験第 1 問問

1 1 の正答に関係する bewerben が③にある。

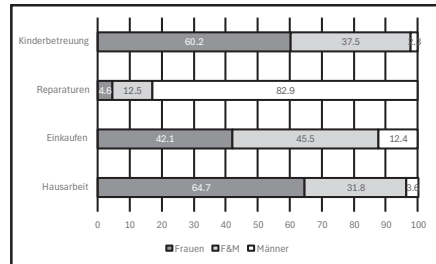
問 3 対話にある表現の言い換えをメモ 28 ～ 30 に入れる。28 は Burghard 博士の 2 つ目 weil 以下、29 は本文の Burghard 博士の 3 つ目の比較級 mehr を用いた最上級の表現、30 は、29 のセリフの次の「Ihre Chance steigt auf eine Stelle」を言い換える。本試験と比べると取り組みやすい印象。

問 4 Burghard 博士の 4 つ目のセリフから判断。選択肢の語彙にも配慮があり、よく練られた

出題であるが、質問文のドイツ語にあるように受験者 wir は Japaner とは限らないのではないかな。

問5 本文内容の理解を問う出題で、本試験にあった2格や過去形が少なく読みやすい。2つの正答を選ぶことは本文理解が深まっていればそこまで難しくはない。

第5問 比較的長い文と図の情報を合わせて設問に答える。本試験と出題数は同じだが、問いは1つ少ない。「ドイツにおける男女差」という社会的な話題ではあるが、日本でも同じ状況であり想像しやすい。合成語も本試験より少なく読みやすい印象を受ける。グラフから読み取る出題では、示したいことに対するグラフの選択が適切とは言えず、受験者が読み取る時に困惑する可能性がある。グラフⅠは各家庭においてそれぞれの項目に関わる男女の割合を示しているのだろうが、その場合は右に示すような100%棒グラフや円グラフを使用した方が受験者に意図が伝わりやすいのではないかな。グラフⅡのEinkommenは男を100%とした場合の女性の割合であることは分かるが、他の項目では何を元にした割合なのかが読み取れない。



問1 グラフに表されている事柄である程度、本文のテーマについて想像することができる。

問2 グラフⅠとⅡからそれぞれ判断する。35は Haushalt, 36は finanziellen Schwierigkeiten やグラフの Einkommen がキーワードとなる。グラフⅠ, Ⅱに目標を絞ればそこまで難しくはない。

問3 グラフの内容に着目し設問のセリフを読む。37は Felix が言う「Zeit」が何を指しているかが分かるか。Deshalb 以下で会社(=社会?)について話しておりグラフⅢを選ぶ。グラフⅠからKinderbetreuungを主に担っている男性は2.3%であることが読み取れるので、子供との時間を重視したいと考えグラフⅠを選ぶ受験者もいたのではないかな。38は, Maria のセリフにある Teilzeit arbeiten, wenig Rente がキーワードとなりグラフⅡを選ぶ。

問4 注意深く本文を読み取れば、問題なく①を選択できる。④Konsum は本試験の第5問の本文及び出題文にも記載がある。

問5 グラフと本文から読み取ったことと選択肢を比べて判断をする。①グラフⅠ, ③本文第二段落, ④グラフⅡに記載があり②が示されていないことが分かる。

第6問 「美しさについての客観的研究」について書かれた比較的長いやや抽象的な文章からの出題。本試験と違い挿絵等がなく、使用語彙や言い回しが難しいと感じる箇所もある。

問1 第一段落では、まず、身の回りの物について具体的な描写をし、さらにそこから生まれる主観的な好みについて述べており正答②を選ぶことができる。他の選択肢は述べられていない箇所がある。

問2 第三段と第四段落にある Kamera, Maschine, Elektrode などが①の spezielle Geräte と ④mit anderen Methoden のそれぞれの言い換えであることが分かるか。

問3 下線部④の前後の第五段落の言い換えを選ぶ。下線部の Großzügigkeit と ④berücksichtige などやや難である。第4問問3の正答に関わる konzentrieren が選択肢にある。

問4 第六段落を読む。下線部⑤の後ろの内容から③を選ぶことができる。

問5 正答④は本文最後の3文に書かれている。問2が理解できていれば正答⑥を選ぶことは難しくはない。選択肢の日本語ばかりを読むと、悩む可能性がある。

問6 大まかに本文内容の理解ができていれば正答②を選ぶのは難しくはない。

3 分量・程度

本試験との使用語数はほぼ変わらない。本試験同様使用語彙の難度が上がり、読みにくさや取り組みにくさが増した結果、分量が増したように感じられるが、本試験ほどではないとも感じる。共通テスト『英語』での問題設定レベル及び使用語彙は CEFR A1～B1 の範囲とされている。ドイツ語も英語に準拠するのが原則ではあるが、到達すべきレベルを B1 と設定することには議論の余地があるのではないかと。

4 表現・形式

繰り返し述べるが、共通テスト『ドイツ語』にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短を身に着ける意識を持たせるためにも発音に関する出題をしてほしい。今回の試験では全体的に、語彙の難度が高いためにその知識がなければ思考しても正答には至りづらく、加えて難度の高い語彙が設問に関わる場所に繰り返し使われ解答を難しくしている。仮に正答を選べていても、理解しているのか分からない。また、第1問は文脈を把握し理解度を測るような設問に見えたが、実際にはかなり細かな文法と語彙の知識が求められていた。

グラフや表から内容を読み取るような出題自体に全く問題はないが、そこから情報を読み取らせるのであれば、表現したいことが確実に伝わるようにラベルの入れ方や使うグラフの種類などにも本文作成と同様に気を配ってほしい。

5 まとめ（総括的な評価）

細かい点をいろいろ述べさせていただいたが、共通テスト『ドイツ語』の問題作成に対し、多くの時間と手間をかけてくださっている問題作成委員、大学入試センターの方々に感謝申し上げます。